

ひらやまえいぞう：『こぐまさんとかえるさん』

今回は、久しぶりに、乳幼児向けの絵本を紹介したいと思います。絵本に始めて出会うくらいの時期にちょうど合う適切な「ふたご絵本」は、なかなかないのですが、「おかあさんのひざぶんこ」という、ズバリそのもののシリーズから取り上げたいと思います。それは、ひらやまえいぞう作の『こぐまさんとかえるさん』です。

実は、この本には個人的な思い入れがあります。私事で恐縮なのですが、この本は、上の娘が普通っていた保育園の元園長先生から頂いたものなのです。転勤のために結局娘はその保育園には二年間しか通わなかったのですが、心から信頼できる園長先生で、お別れしてもコンタクトがありました。ある今頂いた年賀状に、この先生のお嬢さんがふたごを出産したとの消息が書いてあったので、さっそく以前このコーナーに書いた文章とふたご本に関する論考をいくつかお送りしました。そして、そのお礼に送っていただいたのが本書です。

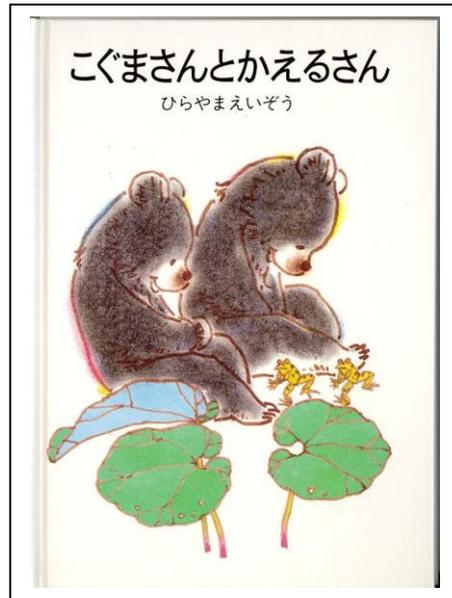
この絵本は、本当にシンプルで、奇をてらった所など全くありません。登場するのも、ふたごのくまの子と五匹のカエルだけです。背景も蓮のはっぱがあるだけで、視点がふたごのくまの子とカエルに集中できるようになっています。また、色合いもやわらかで、おとなしいものです。

ストーリーは、野原で遊ぶのが大好きなふたごのくまの子が、カエルに出会って、かくれんぼのようなことをするといった、一見たわいもないもののように思えるのですが、そこにはちゃんと、出会いと驚きが表現されています。そして、その出会いに呼応するかのよう、ふたごのくまの子たちは、カエルが飛ぶときはちゃんと自分たちもぴょんと飛び跳ねますし、かくれんぼの時カエルを見つけると、ちゃんとびっくりしてひっくり返るのです。しかも、二人一緒にです。

優しい表情のふたごのくまの子は愛くるしい印象を与えてくれるので、自分たちはふたごなんだ、ふたごであることはとつてもすてきなんだと、読み聞かせによって親子ともども確認できる作品だと思います。そしてさらに、自分たち以外の生き物（人）との出会いへと足を踏み出していく喜びも読み取れます。

よく見ると、カエルの数がページによって違っていたり、ふたごのくまの子の位置関係に工夫がされていたり、また、カエルがくまの子の頭に乗っていたりといったずらもあつたりして、細かいディテールにこだわる乳幼児の性格にも配慮が行き届いた絵構成には感心します。

ふたごのおばあちゃんになられた元園長先生も、お孫さんにこの絵本をよく読んであげているそうです。読みながら先生は、ひょっとして、ふたごのくまやカエルのまねをして、ぴょんぴょん飛び跳ねているのではとこっそり想像して、僕はなんだか嬉しくなってきました。



ひらやま えいぞう : 『こぐまさんとかえるさん』 書影

ひらやま えいぞう : 『こぐまさんとかえるさん』 童心社 (おかあさんのひざぶんこ)

『ツインズ』 43号 (ビネバル出版) から転載・修正